
俺の妹がモブキャラなわけがない

箸を一膳用意しろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の妹がモブキャラなわけがない

【Nコード】

N8411U

【作者名】

箸を一膳用意しろ

【あらすじ】

連載中止致しました 眠って起きたら、異世界だった。そんなお話。ただし、その異世界は主人公の知っている作品の世界だっただけ。そこが異世界で小説の世界だと、見知らぬ少女とか妹の言動などから気が付いた主人公、自分の中でそれら全てを整理した時、彼は何かスコンに変貌を遂げていた。別に活躍はしないだろう主人公が織り成すスコンストーリーが今、幕を上げる。 連載中止致しました

第1話 『妹が大事か、ならばよし』

インフィニット・ストラトスというライトノベルを知っているだろうか。現実世界のような架空の世界が舞台の物語であるが、少し違う点があるのが特徴だろう。

それは題名にされているなんか凄い技術の結晶であるロボットのよなモノが発明されており、世に根付いているという事だ。とは言え、その程度は大きく異なるが、人間の運動能力等々を補佐、強化する目的の似たような装置は現実でも研究されている。

それは、全くの夢物語であるかと言われるばなんと返答に困る内容を孕んだ作品と言えよう。いや、この物語に関わらずどのような創作作品であろうとも、本当に実在しないなどとは言えない。そう、言えないからにはそれが何処かには、あるのかもしれないという事。

つまり、そんな世界があったとしても不思議は無いだろう。そう、知る人は知っている異世界という架空の存在が。

「目が覚めたら知らない部屋にいるって……。まさか俺が実際に体験するなんてなあ」

別に不可思議な魔方陣に吸い寄せられたり、大型トラックに撥ねられたりした訳では無い。ただこの青年は普通に、何時も通りに自分の部屋で眠りに就いていただけだ。そして何時も通りに目を覚ますと、そこは何時も通りの景色では無かっただけで。

「……あれ、この雑誌の表紙って？」

青年がここが異世界であると気が付いた切欠は些細なモノであった。いや、そうかもしれないと不安を抱いた切欠と言った方が現状では正確であろう。

枕元に置かれた雑誌、恐らくは寝る前にも読んでいたのだろう。その雑誌には『史上初！ 男性ISパイロット！？』などと書かれていた。それが切欠だった。

「いやいやいや、え？」

話が変わるがこの青年。所謂オタクと言ってもいいタイプの人間である。今、自身が置かれた状況に似ている何かを知っていたのだ。しかし青年はそれに興奮を覚える事は無かった。ただただ、顔を強張らせていくだけ。

「待てよ、待てよつ。違うさ、こんなのオタク雑誌の見出しか何かさつ！ ここだって友達の家かも知れないだろ？ いや、交通事故にでも遭ったのかもしれないしっ！」

青年はこうなる前までは、『異世界に召還されたら、現代知識で活躍してみたいなあ』などと妄想していた事もある。だというのに、そうとなればただただ恐怖に飲まれないように必死に自己を保つだけで精一杯。そんな妄言を吐く余裕など一欠けらも無かった。

ここで現状に戻すが、もしも家族がいるだろう家の中でいきなり、わんわんと喚いている家族がいれば、どうするだろう。心配するだろうか、煩いと文句を言いに行くだろうか、それとも何時もの事と無視をするのだろうか。この場合はその全てであり、行動としては2つ目が近いモノであった。

「うるさいよ、お兄ちゃん！ 勉強に集中できないじゃんっ！」

「……なわけがっ!?! ……へ?」

「なに? 言っておくけど、補欠で合格できたIS学園に行くのを止めるつもりはないからね?」

青年の顔には『なんだこの娘?』という疑問と『IS学園? 本当にあるのか?』という絶望が浮かび上がっていた。

「もう、別に危ない場所じゃないんだからさ。いつつも言ってるけど、一昔前みたいにすぐさま戦争用だっ! なぁんて事にはならないから。病弱だからって急にISオタクってのはどうかと思うよ? なんか情報も古いしさ」

そう、これが、自分がいる場所を知った切欠、転機。『ここは異世界』なのだ知ってしまった、自覚してしまった時である。

「あ、ああ。悪い悪い……、うるさかったか? うん、ええと、頑張れよ? ……というか古かった? はは、はっ、悪いなあ」

青年はどうかしてそれらしい具合に言葉を返す。深くも無く、浅くも無い程度で、それらしい事を。

「……? まあいいや、ああそうだ。そろそろお昼ご飯だけど、なに食べる? オムライスでいい? いいよね? ……おかゆか何かの方が良いかな?」

「お、おお! 全然いいぞっ、問題ない! オムライスで大丈夫!」

「うんっ! あ……、ああっそ、んじゃ出来たら呼ぶね」

そう言い残すと、見知らぬ女の子は青年の部屋の扉を閉めた。そうすると、また静寂に戻る。が、また叫びたい衝動がむくむくと青年の内に生まれた。

「……っ」

だが叫べない。うるさいとあの娘に言われたためだ。いや、あの言動、そしてある単語から全く無関係という訳ではないのだろう。つまりは家族であつて、もっと言えばあの娘は自身の妹という事。

「……はあ。本当なのかなあ？ ドツキリ、なわけないよな。俺にしたところで無意味だし、普通のテレビ番組が異世界転生のドツキリとかしてるの見た事ないし」

ぶつぶつと、小声で言う青年。なんとかここは元の世界であると自分に納得させようとする。そう、現状がそうではないと言い聞かせよう。つまりそれは、自身は既にここが異世界であると確信してしまっているという事である。

青年も馬鹿ではなかった。信じられない事だが、ここはもしかすると異世界であり、創作物の世界かもしれない。そう、信じ始めていた、そう、しないといけない気がしていたのだ。

元の世界で、いい歳だと言うのに自分はこの世界の人間では無いなどと言う男性がいたら、どう見られるだろうか。その男性は、本当に異世界から現実世界へと来てしまったのだとしても。きつと、変な目で見られる、最悪警察か何かのお世話になるだろう。自分もそうなる可能性が高い、そういつた事を思うがままに主張したのなら。なにせ、ISの世界はISがあるという点と、その影響を除けば現実世界とほぼ同じなのだから。

だから、それを抑えて、考えを変えた。それを認めようと努力す

る方向へ。

「……異世界転生、いや憑依か？ ……憑依？」

ここが異世界で、そういった境遇に自身が遭っている事は飲み込む、そして飲み込めた、一時限りかもしれないが、飲み込んだ。

しかし次の問題が彼に襲い掛かってきた。そう、この身体は前の世界の自身と同じ年代のモノ、だが少し違う。顔つきも冴えないながら、前よりは凛々しく感じる。髪質もストレートから若干クセツ気のあるモノに。背丈は変わらないが、肉付きは違う。細いのだ、ガリガリと言っていていいだろう。

「……………」

憑依、創作の中でそうした事が起きるとすれば、その憑依された人間が死んでそう時間が経っていない場合が多い。少なくとも青年が知るのはいった場合であった。

あの娘、妹がさらりと言っていた『病弱』というキーワード、これもその予想を後押しする一因だろう。なにより、今の自身の細さを自覚した今なら尚更だ。

「憑依、憑依か。つまり、俺はあの娘の兄なのか……」

青年にとって幸運だったのは乗っ取りという可能性を知らなかった事だろう。これもまた物語としては十分にありえるモノだということ。

そして、青年はオタクだから当然かもしれないが創作作品を好んでいた。特に、無駄にクサイ台詞などを言う熱血系などが。簡単に言えば、それに影響されて彼も無駄に熱い部分があった。いや、元々無駄に熱い部分があったためにそういった作品が好きになったと

言うべきか。

とにかく、自身が亡くなった誰かの肉体に宿っているとしたのだ、青年は。そして、その自身を兄と言ったあの娘。聞いた言葉だけを考えれば、なんとも何処にでもいる兄を毛嫌いする類に見える。しかし一瞬だけ、兄と話すのが楽しそうな、嬉しそうな面を垣間見ってしまった。きつと、なんだかんだ言っても良い兄だったのだろう。

ISは危ないから止めておけ、そんな事を言うくらいには妹想いな。いや、もしかすると妹がそういった場所に行くとは知ったから必死になって調べたのかもしれない。ともかく、妹を大事に、大事に思っていた良き兄だったのだろう。

「……分かった。俺は兄だ、うん。任せとけよ、俺はきつと良い兄になるからな」

なんとも言えない会話だ。まるで墓前で故人に語りかけるかのよう。しかし青年はそれを自分に言い聞かせているのだから、なんとも言えない。

しかし青年はそれが正しいと考えた。そうとしか考えられなかったのかもしれない。そういった方向で自身を正当化しなければ、耐えられなかったのかもしれない。

自身がこの場に来てしまったのは、こんな状況に遭ってしまったのは、妹を守るためである、と。そう考えなければ。

「……しかし、ISか。どういう物語だっけ？　なんか主人公が女の子にモテモテだったのしか覚えてないんだよなあ、原作は一卷だけしか読んでないし……」

青年はISという作品を知っていた。だが、それを知ったのはアニメ化されてからであり、原作はそこまで読み進めていなかった。もし、それらを詳しく知っていたならば、妹のために何か先に動け

たかもしれない。それについて助言できたやもしれない。そういった後悔が生まれる。

「いや、そんなのはどうでもいいさ……。ここは別に何時死んじやうか分からないような戦国時代って訳でもなし、魔物がうようよいる中世ファンタジーって訳でもないんだからな」

そう、ISは至って平和な世界観の物語だ。少なくとも、一般人に取っては。少なくともアニメ版を見た限りでは。

「あれ？ でも待てよ……。こういった境遇になってる物語の主人公と言えば。いやいや、そんなはずが無いさ」

異世界に来てしまった主人公。そういった物語も青年は良く読んでいた。そして、決まって主人公達に与えられているモノがあるのだ。それは以前までは持っていなかった特別な、特別すぎる力。魔法が使えたり、身体能力が異常に高まったりと様々である。そして、この世界の場合、それだと思えるのは。

「俺って、もしかして史上2人目のISパイロットになれたりするのかな？ ……危ない場面で顔が見えないようなISで妹を守る俺か。……悪くないじゃない」

少しばかり、そういった物語と違うのは、青年は何故かすでにシスコンになっていた事だろう。女の子にモテると浮かれるのではなく、その力があれば良いお兄ちゃんになれる、と頼を緩ませていた。だが。

「いやいや、そんなのじゃ駄目だろ。やっぱり何気無く見守るのが兄ってもんだ！」

以前の世界では一人っ子だったというのに、青年は兄を語り出す。曰く、男は背中で語るだの、優れた兄は妹の危機を救うのではなく危機に陥らないようにするのだだの、どれも言う人によっては格好悪くは無い台詞であるが、独り言な時点で全てが無駄だった。

「でも、そういうのは憧れる、かも。妹も大事だ、それが一番だ。だけど時には自分も大事にしないと、三番目くらいに」

青年の心の内で何が起こったのかは分からない。だが、今の彼はやはり見事なシスコンであった。この世界で生きる意味、それは妹を守る兄となっただろう。

「しっかし、妹がIS学園か……。いや、待てよ？ IS学園で、この雑誌？ ……なんてこった」

青年は雑誌に目を落とし、そして少し考え込むと、ああと嘆くような動きで頭を抱えた。その雑誌には照れているような笑みを浮かべたイケメンが写っているのだ。

「確か、メインは当たり前だけどヒロイン達だったはず……。そしてモブキャラが大勢主人公にキヤーキヤー言っていた……。くそがつ、なんてこった」

妹は『補欠で合格したIS学園』と言っていた。つまり、学園に通うのだろう、当然だが。

そうなれば、妹は、もしかすると、いや確実に、主人公に惚れてしまう。それは良い、妹が好きになったというのであれば応援の1つもしよう。だが駄目だ、ヒロイン達には敵わない。妹が失恋してしまう、いやそれどころか。なんと言う事だ。

そんな事を考えているのが丸分かりな顔で、というよりも小声で
そういつた事を呟きながら、頭を掻き毟る。

「くそがつ、そんな事にはさせねえっ！ 恋が成就するかどうかは
妹次第だっ、そこまで口は出さないっ！ でもっ、その舞台にすら
立てないなんて事はお兄ちゃんは許しませんよっ！」

この時、生まれたのだろう。原作を壊そうとする主人公が。しか
し元の世界で描かれていたそういった主人公とは少し違う点があっ
た。それは作品のなにかを憎んでいる訳でも、納得がいかないわけ
でもない。

ただ、この世界で出会った何かのために変えたいと願っただけだ。
ただただ、妹のためだけに、それだけ。

「俺の妹がモブキャラなわけがねえっ！！」

そう、ただのモブキャラで終わっていたであろう1人の少女を、
どうにかしてヒロイン勢に加えようと奮闘する1人の兄という名の
主人公が生まれたのだ。

第2話 『兄とは家族、他人ではないのだ』

青年が兄となった日の翌日、ベッドから身を起こすと、そこにあったのは見慣れぬ部屋。しかし見た事のある部屋であった。

「まあ。もしかして、なんて思ったりもしたけど……。やはり俺は兄だったか……」

よく分からない事を口走ると、ゆっくりとベッドから降りる青年。寝巻だろうか、青年の身体つきは服の上からも痩せている事が分かる、それも病的に。しかし、何故かだるいだけの、気分が優れないという事は無い。むしろ、身体を動かしたくて堪らない衝動を抑えられないくらいであろう。事実、青年はゆっくりと、確かめるように腕をふるふると振るっていた。

「んー、やっぱり貧弱って感じた。駄目だ、これじゃ妹を守れないっ！ くそっ、そうとなれば鍛えるしか道は無い、けどもだ」

青年は先日の醜態に比べ、実に落ち着いていた。或いはこれが地なのやもしれない。どれほどの知識が、智慧が秘められているかは知る事は叶わないが、青年は目を瞑り、その脳裏に描かれる、解決する方法を確かめる。

「昨日、インターネットで調べた限り、家族いもつとを守るにはまず食生活からって書いてあったから……。料理を極めるべきかっ!？」

やはり青年は青年であった。何処かズレながらも、方向性だけは一向に変わる気配が無い。しかし、妹と声に出した時、ハッと何か

に、重大な何かを見落としていた事に気が付いたらしい青年。

「な、なんてこった……。お、俺はっ！ 妹の名前を知らない！？
妹のっ、なまえをっ！？」

ガクツという擬音が相応しい崩れ方をしようと試みる青年。しかしひ弱な身体はそれすら許さなかったらしく、ゆっくりと、そのポーズを取る青年だった。

「なんてこった……。ここまで貧弱だったとは」

ガクツとした理由が先ほどと異なるが、同じようにガクツとした気持ちでそのポーズを取り続け、愕然がくぜんとした声色でそう言う青年。

「いやっ！ そんなのはどうだって良いんだ、今は名前！ マイリトルシスターの名前っ！！」

バツと立ち上がりたかったのだろう。しかしやはりと言うかゆっくりと立ち上がる青年。難儀な事である。

そのまま、ゆっくりとした足取りで自室から出ようとする、そして扉を開けた所で。

「きゃっ、……。ちょっと！ お兄ちゃん、いきなり出てこないでよっ！」

「おっと、ははっ。悪いな、リトルシスター！」

扉を開けた時、丁度妹が通っていたらしく、突如開いた扉に驚いている妹。もしかすると、こうなるまで、青年がこうなってしまう昨日までそうそう開く事は無い扉だったのかもしれない。少なくとも

も、兄が自発的に開く事など。それほど、扉に開いただけにしては驚いていたのだから。

「リトルシスター？ 何言ってるの……、っ！もしかしてまた熱でも出たの!？」

「ああ、いや。出てない、普通に平熱だよ。というか、補欠とは言え合格出来たつてのにまた勉強かい？」

朝のテンションというモノだろうか、それとも名前を知らないためにだろうか。ともかく、普通ではない呼び方をしたために妹は考えを飛躍させている。それを落ち着かせるため、青年はなんとも無いと言つて手を振る、ついでに話し方をそれらしいと思えるものへと戻すという高等テクニクを披露した。

「本当？ なら良いけど、昨日から調子良さそうだよ。うん、ご飯……も良く食べてたし」

青年の巧み過ぎる技によって違和感を感じる事は無かったようで、なんてことは無い事を言い始める妹。

そのご飯とは、オムライスの事だろう。事実として、青年は良く食べた、食べすぎと思えるくらいに食べた。妹の中の青年、つまり兄は病弱であり、食が細かったのだろう。だというのに、食べた。完食した。

「……美味しかったからね」

ただ腹が減っていたから、ではないだろう。本当の理由は兄が兄ではなくなったためだ。ここに居るのは妹の知る病弱な、けれども大切な兄では無いのだから当然だ。しかし、青年が言った理由は妹

の料理の腕を褒めるものだった。

「っでしょ？ 昨日はたまごが綺麗に焼けたし、それにケチャップライスもね……」

細い廊下で、およそ長話するには向かない場所で兄妹はそれなりに会話を楽しんだ。会話というには、話し手は妹ばかりで、兄はうんうんと頷いてばかりではあったが。そして、結局青年が問うた勉強云々の話は流された。

朝食を食べ終わった青年はまた自室へと戻っていた。ちなみに朝食であるが、メニューは白米に味噌汁、加えてたくわん。なんともシンプルなものだった。その時、青年にとっては少しばかり驚く事があった。というより、昨日もそうだったのだが、余りの空腹のために、そして落ち着いたとは言えどもまだまだ混乱していただろうために気が付かなかった事によろやく気が付いたという所だろうか。

はい、お兄ちゃん。あーんして。

「……ふう。俺が兄で無かったら危ない所だった」

簡単に言えば、食べさせようとしてきたのだ。満面の笑みで。なかなか心にクルものだったらしく、青年は掻いてもいない汗を拭う動きをして動揺を納める。

「それにしても……、この家。それなりに立派なんだけど、両親って何処にいるんだ？」

兄となる覚悟、決心をしてから、というよりつい先ほどから疑問に思っている事だ。親が居ないのである。そういえば、原作主人公にも親は居ないななどと考えながら、そう呟く青年。

そもそもは妹の名前を知りたい。それが切欠だ。理由は親ならば名前で呼ぶだろうという考えに至ったためであった。ついでに、自身のこの世界での名前も。しかし、居ない、そのために呼ばれない、分からない。

名前を知るための上手い方法が思い浮かばないために、青年はこちらの疑問へと思考を切り替えたのだ。

「そもそも、俺は病人……だった。なら入院するものなんじゃないか？」

そうだろう。兄となった前までの彼が亡くなったために、青年となったのだから。それ程までに衰弱していたのだから。入院して、それを避けるために尽力するのが筋というものだ。親が居たのであれば普通ならばそうする。

しかし、そうでは無かった。そもそも、妹の料理は確かに美味しかったが、病人に食べさせる類のソレでは無い。昨日こそ、おかゆなどと言っていたが、本人がオムライスで良いと言ったから、それじゃそれで。などとはいかないだろう、病人なのだから、無理矢理にでもそのための食事を与えるべきだ。

恐らく、そのための食事ではおかゆ程度しか思い浮かばないのだろう。そもそも、それについて考える青年もまた、詳しくは知らない。

「両親の事を調べてみるべきか？」

妹に対して『お前の名前はなんと言ったか』と聞くよりは『母さん達は今頃なにをしているのか？』などと言った方が当たり障りが

少ないだろう。

しかし、自身が特殊すぎる境遇に当たるために、最悪の予想が出来てしまっていた。それはつまり。

「……どうしよう。普通に有り得る」

もしも、そうだとしたのならば、妹のなんだかんだと言いつつ兄を慕う様子も理解が出来る。彼女にとって、兄は兄であると同時に父親であり母親なのかもしれない、と。

「なんという事だ。俺は父と母でもあったのか……」

そう、またも自分の道を猪の如く突き進もうとするかのように呟いた時だった。煩い(煩い)という程大きくも無く、しかし耳に障る程度には小さくも無い電子音が青年の自室に響いた。それは携帯の着信音であるようだった。

「……ふむ」

そこには『母さん』と表記されており、なんとも言えない表情で青年はソレを手取る。

「……もしもし？」

『守？(まも) 良かった、起きてたのね。未希(みき)に電話しても出なかったから……。それはそうと、入院する気にはなった？』

あっさり、全ての問題は解決されてしまった。流石は母親と言う事だろうか。しかし青年は妹の名前が知れた事の喜びでそれどころでは無かったらしい。未希、そう言う名らしい。青年の知っている

るISのヒロイン勢に比べなんとも平凡。元の世界でも同じ学年に探せば1人はいるかもしれない、その程度の珍しさである名前であった。

「未希……か」

『……？ ちょっと、聞いているの？ 貴方があんまりにも家に残るっていうから、無理を聞いてるけど、やっぱり辛いでしょ？ ね、入院しましょう？ 未希がIS学園の寮に行く事になったんだし、もう、ね？』

どうやら、兄だった兄は妹のために家で闘病生活する事にしていたようだった。それに無駄に熱い部分のある青年は目頭を熱くしながらも、いや、と言葉を返す。

「もう、問題ないよ。ああ、問題ない」

両親が、少なくとも母親がいるというのに、自宅療養を許せるという事はそれほど重い状態では無かったのか。そう考え込みながらも、入院の必要は無いと何度も告げる青年。

しかし母親の対応は異なっていた。強く、やはり何度も強く言う。入院しなさい、と。もう、無理を聞くのも限界だ、私のためにも入院して欲しいと。

「……分かったよ。母さんは未希が入学する前には帰ってくるの？ あいつが入寮するまでこっちに居られるなら、母さんが戻った時からでも入院するよ」

どうなんだろう。やはり重かったのか。そう思い直すくらいには、母親は必死だと感じられた。妹と同じような、兄だった兄を想う母

親の、家族の愛を感じた。

青年にとって、この世界で生きる理由は、異世界人として活躍したいという願望ではないのだ。たとえISという力の象徴を操って、誰かを守るといふ事には憧れる、そういつた『主人公』に恋焦がれる自分が在るのは否定できないとしても。

それでも青年にとって、この世界で生きる理由は、妹を守る兄になりたいという願望であった。それはつまり『主人公』という憧れの立場よりも、重きを置くべきモノがあるという事だ。そうして家族を大切にするといふ事に繋がり、母を安心させる事も大切な事である、と。

『本当っ！？ こうしちゃいられないわっ、待ってて！ 今すぐにそっちに飛ぶからっ！！ 嘘は駄目よ？ 絶対入院して、そして元気になるの、いいわねっ！？』

母親はそう早口に、しかし普通では無い喜びを隠せていない声色で言い切る。青年が了承の返事をする前に、電話を切られる。もしや本当に今からこちらへ来ようというのだろうか、それ程に急いでいたように、いや必死とすら感じられた。母親なのだろう、本当に母親なのだろう。

「切れた……」

そう零しつつ、青年は考えに沈む。妹の様子に加えて、あの母親の様子。重い、重いのだ。嫌な考えが消えないのだ。兄であった兄は既に居ない。死んだ、とすら言いにくい状況。もしかしたら。

自分がこうならない方が良かったのでは無いか。

普通に、兄だった兄が、自宅で亡くなった方が良かったのでは無いか。それは妹と母親を酷く悲しませる事だっただろう。しかし、こうなるよりは幸せであったのでは無いだろうか、と。普通であったのでは無いか、と。

「……自分よりも、妹を、家族を優先する……かあ」

なんとも難しいモノだ。こうなると、自分を優先しなくなる。度し難いモノだ。ここに来て、初めて青年は『打ち明ける』という選択肢に思い当たってしまったのだから。それが正しいと思えて来てしまったのだから。今まで、なんとか見ないようにしていたソレに、悔しい事に。

「どうしようかなあ……」

もしそれを伝えたならばどうなるだろう。その結果が青年には分かる。別に頭が良い訳でも、超能力で未来が見える訳でもなく。ただ、そういった境遇、シチュエーションを描いている作品では、そうなっている事があると知っているだけだ。

それは。青年には。辛い現実だ。

「怒られる、かな。いや、訴えられるかもなあ、返してつて。なんて言ったら良いんだろう。魂おれがどうにかして死ねばいいんだろうか、それで兄は戻るんだろうか」

鬱では無い。葛藤だ、苦悩である。青年は青年であるのだ、無駄に熱い部分がある、普通の、ごくごく普通の青年であったのだ。それが今は特殊な、まるで『主人公』のような境遇に遭っているだけで。

青年が知る物語では、その最悪の流れにはならない場合もある。

しかし、それはある程度、青年という中身を相手が知っていた場合に限られる。この場合はどうだろう、それは簡単だ。無い。絶対に無い。

妹や母親にあるのは兄だった守まもという兄かぞへに対する想いであって、兄になった青年せいじんという兄たにんに対する想いでは無いのだから。

「俺には主人公なんて、なれそうもないや。いや、それよりも兄になんてなれる訳が……」

青年は嘆くように零す。この世界で自身を保つ理由が崩れようとしているのだ。それによって抑えられていた恐怖というどうしようも無い感情、それが蘇ってくる。

そもそも兄となると決心したのは果たして本当に妹のためであったのだろうか、この身の前身である兄だった者のためであろうか。違うだろう、自分のためだ。自分だけのためだ。最初から分かっていた事だ。だから、出来る限りボロを出さないようにしていたのだから。

その事実にも、ここまで速くソレにぶつかるとは思っていなかったのだろう。それにぶつかるのは、自分がこの世界で自分を、自分で保てる自信を得てからだと考えていたのだから。

「あれだな、もう家を出て、一人で生きていこうかな？ 異世界に来たんだ、きつと凄い力だつてある。好き放題やってみるのもアリだよなっ！」

空しく響く、声に力は全く無い、ただただ言ってみただけ、それだけだった。いや、青年はどうやら気が付いたのだろう。どんな境遇だろうと、青年は青年であり、自分は自分なのだと。

そもそも凄い力が有るのか無いのかも分からない、しかし少なくとも今は無いと思える。それに加えて自身の身体は現状、貧弱極ま

りない。野宿などしたら、いくら中身が健康だとしても遠からず身体を壊すのは目に見えており、そもそも資金も在るのかさえ知れない。

いや、そんな現実問題などどうでも良いのだろう。

青年は、嘘でもなんでも言ってしまった。決めてしまったのだ。無駄に熱い部分のある青年は、叫んでしまったのだ。

俺は兄になる。任せておけ、良い兄になってみせる。

それが例え自分のためだけの理由のためだったとしても。それが一時の感情に流されたモノだったとしても。

青年は曲げたく無い。無駄に、熱い、青年自身が決してソレを許さない。

兄になる事を諦める結果になるかもしれない、それは良い。けど、それを言った事を無かった事にだけは、したくない。

それをするには、簡単だ。打ち明ければ良い、実に簡単、そして安全。だが、青年は今、無駄に、熱くなってしまうていた。

無駄に、熱くなっていたのだ。実に無駄。それどころか自分に取っても、或いは妹、家族にさえも害ある情熱であるだろう。しかし、これは冷めない、もう、冷めないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8411u/>

俺の妹がモブキャラなわけがない

2011年11月16日23時58分発行